

シンポジウム報告書

視察研修を下記のとおり実施しましたので、報告いたします。

記

- 1 実施日 令和元年12月14日
- 2 参加者名 池田憲彦
- 3 視察および事項 上智大学・ICU 共同国際会議
「移民二世の時代—不平等の克服に向けて」

4 視察概要

(1) 10:30~11:30 基調講演1

シンシア・フェリシアーノ（ワシントン大学セントルイス校）

「アメリカにおける不平等が移民の子どもの将来に及ぼす影響」

アメリカにおいては、全体として「包摂（inclusion）の時代」に成人した移民の子どもは、ばらつきはあるが社会経済的統合におおむね成功している。このことは、以下の要因と関連している。

- ・移民集団が出身国の上層にあったこと
 - ・両親が相対的によい状況にあったこと
 - ・公的高等教育機関により機会構造が開かれること
 - ・移民・難民に対してよい受入れの状況（context）
- 将来への含意（imply）
- ・高等教育への機会に対して包摂的な時代（1980年代のカリフォルニア）には、移民の子どもが成長すると平均より高い教育・職業を得ることができた。しかし、今日のアメリカは大いなる排除へ向かっている（強制送還、白人ナショナリズムの台頭、法的地位の低下など）。



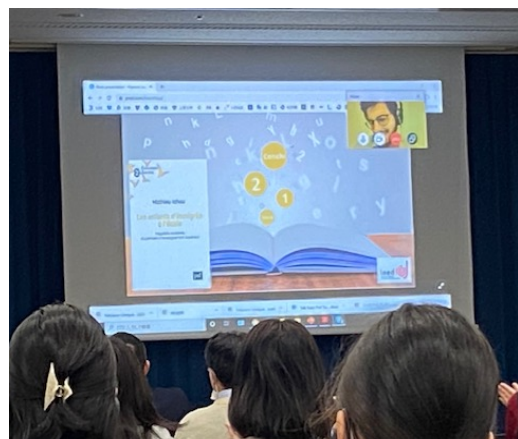
(2) 10:30~12:30 基調講演2

マチュー・イシュー（フランス国立人口研究所）

「フランスにおける移民の子ども：初等教育から高等教育に至る不平等」

＜アクシデントで来日できず、スカイプによる講演＞

移民を社会問題としてみる狭い見方を打破するためには、学校で落ちこぼれる同質的な集団として第二世代を単純化しないこと、移民の過去の経験を無



視して、入国以降しか研究しない態度を改めることが必要である。

学業の軌跡は、ある国の出身者に共通する出身文化よりも階級文化の方が、学校に対する移民の態度との関連が強い。また、親から遺産よりも学校、兄弟、近隣の役割が大きい。

(3) 13:30~17:00 報告

①樋口直人（徳島大学）「移民第二世代の教育達成と教育制度」

移民第二世代での分岐：東アジア籍は緩やかに、ベトナム籍は急速に第二世代の優位性を実現。フィリピン、南米籍は第二世代の転落。もともとの人的資本などでは、集団間の分岐を説明できない。

集団内については、親の学歴が意味を持つ。また、高校での中上位校に進学するには、幼少時からの安定的な環境が大きく影響する。

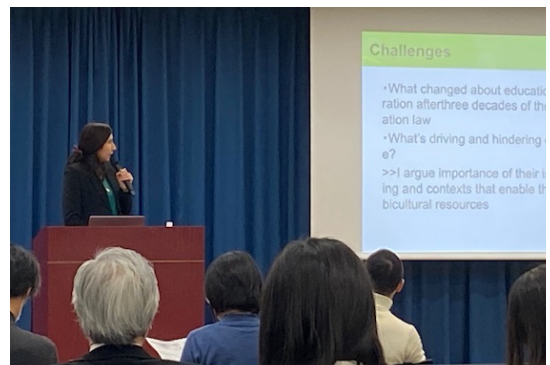
特別入試が、日本での機械構造となってきた。これはマイノリティを対象としたものではなく「意図せざる結果」だが、機会確保のためには「エリート選抜」にも広げる必要がある。

②オチャンテ 村井 ロサ メルセデス（桃山学院教育大学）

「移民第二世代の進路選択・キャリア形成支援における課題：三重県の事例を中心に」
三重県内の外国人住民数は52,087人で人口比2.77%である（H30/12/31 現在）。

対象地域である三重県では、高等学校の進学率が上がり、高校まで進学することは当たり前な進路形成として受け止められている。しかし、中途退学する若者は少なくない。また、高等学校を卒業しても地元で彼らの強みを生かす場が少なく、ブルーカラー労働者として生きる保護者と同じ道を進むこともある。

今後は、正規労働者として労働市場に魅力を感じ、職業能力を向上させる仕組みをつくり、保護者と共にキャリア形成について考える場を確保する取り組みが求められる。



③小波津ホセ（宇都宮大学大学院博士課程）

「移民第二世代とコミュニティ存続の課題：栃木県真岡市の事例を中心に」

栃木県真岡市は、1990年の入管法改正後に派遣会社があったことから出稼ぎ労働者の拠点となった。外国人人口比率が4.17%（2018年）と高く、ペルー人のコミュニティが形成されている。

コミュニティに所属することで、移民第2世代への影響としては、コミュニティへの「帰属意識」が芽生え、将来的な成功、文化活動への参加が期待できる。また、エスニシティが力の源となり、コミュニティのネットワーク利用で這い上がることができる。

しかし、入管法改正から約 30 年経過した中で、出稼ぎ者の子どものコミュニティへの帰属意識は、親に同行して来日した子ども（1.5 世代）より 2000 年代以降の子ども（第 2 世代）にみられる傾向として、言語や文化等が継承できていない子どもほどコミュニティからの離脱傾向がある。

真岡市のペルー人の課題として、トランスナショナル・コミュニティに留まらない第 2 世代の文化等の継承意義への認識と「失われた世代」の救済に取り組まなければならない。



④ラファエラ・ヨシイ・オリバレス（東京大学大学院博士課程）

「在日ブラジル学校に通う移民二世の学業達成」

ブラジル学校とは、日本に暮らす主にブラジル人を対象にブラジルの教育を提供する外国人学校で、全国に約 50 校存在する。そのうち 30 校が日本において高等学校相当として指定されている。ブラジルの教育機関への橋渡し役だけでなく、日本の学校に適応できなかった子どもの受け皿役を担ってきた。

ブラジル学校は、柔軟な受け入れ体制により学業中断を防止したり、方向転換が生じた場合も接続を容易にし、また慣れ親しんだ環境で安心して学べる場を提供するなど、トランスナショナルな空間における学業を支える役割を果たしてきた。今後は、どこで進路を実現するかに関係なく、生徒たちが自由に進路を選択できるような仕組みづくりが必要である。



シンポジウム「移民二世の時代—不平等の克服に向けて」に参加して、各講演者、報告者から参考となる多くの事例を聞くことができ非常に有意義であった。鈴鹿市も多くの外国人住民が住んでおり、日本で生まれた移民二世が増えてきている。今回のシンポジウムから学んだことをもとに、鈴鹿市の外国人問題や多文化共生に取り組んでいきたい。